

精神障害を有する者の作業選択に伴う 意味の度合いと生活満足度

國貞将志 港 美雪 山口隆司 小池伸一

The degree and the life satisfaction of the meaning with
the occupational choice of people having the mental disease

Masashi KUNISADA, Miyuki MINATO, Ryuji YAMAGUCHI, Shinichi KOIKE

要 旨

本研究では精神障害を有する者 36 名を対象に、典型的な 1 日の作業を選択する際に伴う意味の度合いと生活満足度との関係を明らかにすることを目的に調査を行った。作業選択に伴う意味を「願望」、「必要性」に分類し、それぞれの主観的な度合いと生活満足度との相関について分析を行った。その結果、すべての作業において、その選択に伴う 2 つの意味の度合いの高さと生活満足度には正の相関はみられなかった。作業療法において、クライアントが「願望」「必要性」の意味を強く伴う作業を選択し、従事することを作業療法士が支援するだけでは、必ずしも生活満足感にはつながらないことが示唆された。

キーワード：作業選択、生活満足度、作業科学

Key Words：Occupational choice, Life satisfaction, Occupational science

はじめに

近年、クライアントの「願望」や「必要性」を反映した「意味ある作業」の可能化を目指した作業療法の実践が重要視されるようになった。クライアントにとって「したい作業」や「行う必要がある作業」で、個人的に有意義と感じる作業が「意味ある作業」であり、それができるようにすることが作業療法実践の目標となってきた。そして、その実践のプロセスはトップダウンアプローチが有用であると言われ、近年数多く報告されるようになった。トップダウンアプローチとは、個人的に重要な作業の問題を捉え、それを遂行するために必要な援助を行う、目的志向的な介入方法である。例えば、「意味ある作業」におけるクライアントの遂行度と満足度を高めることを通じて、生活満足度の向上や健康促進を目指す作業遂行プロセスモデル（OPPM：Occupational Performance Process

Model）では、第一段階において、カナダ作業遂行測定（COPM：Canadian Occupational Performance Measure）により、「したいと思う」、「する必要がある」、「することを期待されている」という意味に基づく作業に焦点を当てた評価から開始する^{1), 2)}。また 2002 年に、アメリカ作業療法士協会（AOTA：American Occupational Therapy Association）が発表した「作業療法実践の枠組み－領域とプロセス（OTPF：Occupational Therapy Practice Framework）」³⁾においても、作業療法のプロセスは、「何をしたいと思うか」、「何をする必要があるのか」にまず焦点を当てる。このように国際的には近年、作業の可能化を通して生活満足感を含む QOL や健康促進を目指す視点を前提としたトップダウンアプローチが重視されているようになっている。

作業療法の実践において、このような作業に焦点を当てる根拠となる作業の知識（作業科学）を深め

るため、小林は、在宅生活者 154 名を対象に、典型的な 1 日に選択した作業に関して、「願望（したい）によるものか」、「義務（しなければならない）によるものか」、「両方の意味を持つものか」、「どちらの意味もないものか」について聴取し、どのように生活満足度に影響を与えているのかについて調査した。その結果、「願望」と「義務」の両方の意味を伴う作業の数が多い対象者は生活満足度が高く、どちらの意味もない作業の数が多い対象者は生活満足度が低かったことを報告している。そして、このような意味を伴う作業を生活にとり戻すことを目標にすることにより健康促進に寄与できることを示唆している⁴⁾。

しかし、作業選択にどの程度、「願望」や「必要性」といった意味が伴うことで、生活満足度に影響を与えるのかについては明らかにされていない。また精神障害を有する人々を対象とした報告もほとんどない。このように作業選択に伴う意味が、どのように生活満足度や健康に影響を与えるのかといった作業科学の知識は、作業に焦点を当てた実践を行うためには必要である。

本研究は、精神障害を有する人々が日常的な作業の中で、どのくらい「願望」および「必要性」を感じて選択しているか、またそのことはどのように生活満足度と関係があるのかについて明らかにすることを目的に調査を実施した。

方 法

1. 対象者と調査期間

岡山県と広島県の 3 ケ所の精神障害者社会復帰施設および通所リハビリテーション施設の利用者 143 名（男性 102 名：女性 41 名、統合失調症 108 名：その他 35 名）のうち研究の協力の承諾が得られた 36 名（男性 25 名：女性 11 名、統合失調症 28 名：

その他 8 名）を対象者とした。対象者の平均年齢は 46.4 ± 10.7 歳で地域生活年数の平均は 12.8 ± 10.7 年であった。調査期間は平成 18 年 3 月～5 月に行い、調査の時間と場所は対象者にとって、リラックスした状態で行えるよう配慮した。

2. 調査方法

調査は直接聞き取り法で行い、筆頭著者が個別に実施した。聞き取りの内容は、1) 1 日 24 時間の 1 時間単位の具体的な作業内容、2) 各作業に伴う「願望」、「必要性」の 2 つの選択の意味の度合いについて、それぞれ聞き取りを行った。具体的には聴取した作業内容について願望は「どのくらいしたいと思いましたが?」、必要性は「どのくらい自分にとって必要性を感じましたか?」と質問し回答を得た。各意味の度合いについては、対象者の主観に基づき「1 から 10 で言えば何点くらいですか?」と質問し 10 段階で評価した。

聞き取った作業内容および意味の度合いは著者らが作成した作業質問紙に筆頭著者が記述した。表 1 にその記入例を示す。また「願望」、「必要性」の 2 つの意味を伴わない作業については「その他」として対象者が評価した。

生活満足度の評価には生活満足度 100 点法を用いた。この方法は、口頭で「最も満足な生活を 100 点とした場合、あなたの今の生活の満足度は何点くらいですか?」と質問し点数を得るもので、工夫版 PGC モラールスケールや主観的幸福度スケールとの強い相関が認められているものである⁵⁾。さらに調査において特記すべきことは、備考欄に自由記述として記録した。

3. 分析方法

各対象者別に聴取した「典型的な作業内容」にお

表 1 作業調査票と記入例 (一部省略)

時間	作業内容	意味	度合い	備考
20:00～21:00	テレビ鑑賞	願望	1・2・3・4・5・6・7・8・⑨・10	
		必要性	1・2・3・④・5・6・7・8・9・10	
		その他	①・2・3・4・5・6・7・8・9・10	

表2 作業選択に伴う各意味の総和と生活満足度の相関係数 (n=36)

	願望	必要性	生活満足度
願望	-	.410**	.019
必要性	.410**	-	-.230
生活満足度	.019	-.230	-

** P<.01 * P<.05

表3 生活満足度の違いによる自由記述の比較 (n=36)

	高満足群※	低満足群**
人数(人)	21	15
全体に対する割合(%)	58.3	41.7
自由記述の内容	生きがいとなる作業がある 期待しているだけの収入がある 居場所がある できる仕事がある	収入が得られない 他にやることがない 他の選択肢があれば、もっとやりたいことがあったと思う

※高満足群は生活満足度60点以上の対象者
 **低満足群は生活満足度60点未満の対象者

ける1時間ごとの「願望」と「必要性」の度合いの1日24時間分の総和(満点240点)と生活満足度との相関分析を行った。分析にはピアソンの相関係数を用いた。統計処理には、統計ソフトSPSS11.0J for Windowsを用い、有意水準は危険率5%未満とした。

結 果

表2に示すように、1日における作業選択に伴う「願望」と「必要性」の度合いは、すべての作業において、生活満足度と正の相関はみられなかった。また自由記述欄には、生活満足度が60点以上の高満足群(21名、全体の58.3%)の対象者は、生活満足度が高い理由について「生きがいとなる作業がある」、「期待しているだけの収入がある」、「居場所がある」、「できる仕事がある」といったことが挙がっていた。それに対して60点未満の低満足群(15名、全体の41.7%)の対象者にとって、生活満足度が低

い理由については、「収入が得られない」、「他にやることがない」、「他の選択肢があれば、もっとやりたいことがあったと思う」といったことが挙がっていた(表3)。

考 察

本研究の結果から、対象者が「願望」、「必要性」を強く感じる作業を選択し、行うことは必ずしも生活満足度向上につながらないことが明らかになった。つまり作業選択に伴う意味の度合いが同じであっても、生活満足度が高い対象者と低い対象者が存在する結果となった。その要因として高満足群の自由記述欄には1日の作業体験を通して「生きがい」を感じたり、収入や他者からの承認といった「報酬」を得たりといった個人の目標達成に関する情報が挙がっていた。また、作業を通しての「生活空間の確保」や「仕事」という役割や価値といった目的が明確であることも挙がっていた。一方、低満足群では、

そのような本人の目標・目的が作業体験を通して十分に達成されないことが自由記述欄に挙がっていた。土屋らは高齢者にとっての「必要性」と「主観的QOL」の関係について、「作業の必要性があっても、その作業に役割や目的を見出せなければ、主観的QOLが低下することにつながる」と報告している⁶⁾。またEganらは、「人は作業の体験を通して個人的に重要な目標や目的が達成された時、その作業は意味のあるものとなり、満足することができる」としている⁷⁾。このように作業選択に伴う意味の度合いが高くても、その後の作業体験での意味（個人的な目標・目的の達成）につながらなければ生活満足度向上につながらないと考えられる。本研究の結果においても、高満足群は「生きがいとなる作業がある」、「期待しているだけの収入がある」といった目標・目的の達成に関する自由記述の内容があり、このような作業体験に伴う意味の存在が生活満足度の高さへ影響を与えていたことが考えられる。それに対して低満足群は「収入が得られない」といった目標・目的の未達成により作業体験に伴う意味が乏しくなり、生活満足度が低下したのではないかと思われる。加えて「他にやることがない」、「他の選択肢があれば、もっとやりたいことがあったと思う」といった記述内容から、限られた選択肢の中で「願望」や「必要性」の意味を強く伴う作業を選択していることが考えられ、対象者自身の新しいニーズが反映されていないことが生活満足度低下につながったものと考えられる。したがって作業療法ではクライアントが、どのような文脈から、その作業を選択したのかについて把握することおよび、その作業を遂行することが、どのような個人の目的・目標につながるのかについて理解しながら、それを達成できるように介入することが重要であり、作業選択に伴う意味に加えて、作業体験に伴う意味も重視することが重要であると示唆された。

おわりに

本研究の限界は、対象者が一部の限定された地域の精神障害者社会復帰施設および通所リハビリテーション施設の利用者に偏っていたことである。そ

のため、本研究の結果を地域で暮らす全ての精神障害者を有する人々に一般化することはできない。したがって、今後は結果の一般化について検証していくことが課題である。また今後、質的研究を行うことで、精神障害を有する人々の意味を伴う作業選択が、どのような体験をすることによって、「有意義な作業の体験」につながるのか、そしてどのように生活満足度向上につながるのかについてのプロセスを明らかにしていきたい。そして、このような作業科学の知識を生かし、精神障害を有する人々が作業を通して地域で当たり前の生活を営めるようになることへつながる実践に取り組み、作業療法の発展に貢献していきたいと考える。

謝 辞

調査にご協力いただいた精神障害者小規模作業所、精神科デイケアの利用者の皆様および職員の皆様に感謝いたします。

Abstract

I investigated it for the purpose of clarifying relations with the degree and the life satisfaction of the meaning to be accompanied with when I chose occupation of a day for 36 people having the mental disease in this study. I classified meanings with the occupational choice in "want", "necessity" and analyzed it about correlation with each subjective degree and life satisfaction. As a result, in all occupation, the equilateral correlation was not watched in height and life satisfaction of the degree of two meanings with occupational choice. That it was not always connected in life feeling of satisfaction was suggested only by a client chose occupation to be strongly accompanied with a meaning of the "want" "necessity" in occupational therapy, and an occupational therapist supporting that I engaged.

引用文献

- 1) Fearing, Law, & Clark (1997) Enabling Occupation : An Occupational Therapy Perspective. Canadian Journal of Occupational Therapy 64 : 11

- 2) 吉川ひろみ 上村智子訳 (2004) カナダ作業療法士遂行測定第3版
- 3) AOTA (2002) Occupational therapy practice framework : Domain and process. Amer J Occup Ther 56 : 609-639
- 4) 小林法一 宮前珠子 清水満 (2002) : 日常的な作業に個人が付与する意味に基づく作業バランス - 健常者と老人保健施設入所者の比較 - 作業療法 21 巻特別 : 603
- 5) 小林法一 宮前珠子 (2002) 高齢者の主観的 QOL の評価 - PGS モラールスケールの工夫と満足度 100 点法について 総合リハ 30 巻 4 号 : 359-362
- 6) 土屋景子 井上桂子 (2004) 主観的 QOL 評価に基づいた作業療法 - 高齢障害者維持期における試み - 作業療法 23 巻 : 143-152
- 7) カナダ作業療法士協会 (2000) 作業療法の視点 - 作業ができるということ : 3・40・42
- 8) Heard C (1997) : Occupational role acquisition a perspective on the chronically disabled. Amer J Occup Ther 31 : 243-247
- 9) 金子晃一 伊藤哲寛 平田豊明 他 (2002) 精神保健福祉法 星和書店 : 14,

参考文献

- 1) 鷺田孝保 (1999) 基礎作業学 協同医書 : 220
- 2) B. Rosalie, J. Miller, et al (1995) 作業療法実践のための6つの理論 協同医書出版社 : 5
- 3) Crepeau, Cohn & Schell (2005) Willard Spackman's Occupational Therapy Ninth Edition : 29
- 4) 丸山ひろみ (2004) 生活場面における権利の視点 - 生活支援センターのかかわりを通して - 精神保健福祉 35 (4) : 322-325
- 5) 吉川ひろみ (2005) : 作業療法における「作業」の変遷 作業療法ジャーナル 39 (12) : 1160-1161

